

**(1) 講話【「悲しみの底に息づく音楽に耳を傾ける」】**

今月は3.11から15年を迎えます。ここ最近、今から7年前に宮城県の音楽療法士・植木垂弓先生がお話しされていた表題の講演内容をふと思い返していました。その一部をご紹介します。

\*\*\* 前略 \*\*\*

**「何もしないをしに行く」**

初めて聞いたその言葉は、その後7年続いたお茶っこ(医師たちによるお茶飲みの場)の一貫したテーマとなった。2011年12月、実際に目の当たりにした被災地大槌の状況は想像を超えたおどろきだった。そこには「どうして自分だけ生き残ってしまったのか」「あの時死んでいたほうが楽だった」「夜眠るのも朝起きるのもつらい」といういのちが沢山あった。これまで私は、音楽への信頼のみを頼りに多くの患者と関わってきた。しかし大槌には「音楽の癒し」というような聞こえの良い言葉を寄せつけない厳しさがあった。

仮設住宅集会所は、被災された方たちにとって、ようやく辿り着くことのできた安心できる場所の一つである。そこに縁のなかった人間が突然やってきて、好きか嫌いかも分からない音楽をすることがどうということか、私の音楽への信頼は不安と無力感に圧倒された。それでも、テーブルの隅に小さなリズム楽器を置いてみたところ、高齢の女性が手に取って鳴らし始めた。それを機会に『たきび』を歌い、クリスマスソングを歌った。誕生日の方のために、『ハッピーバースデー』を歌ってお祝いもした。皆さん喜んでくださった。けれども私の中には、バースデーソングは別にしても、『たきび』やクリスマスソングはその方たちにはそぐわないという印象が残った。

見回すと、涙をぬぐいながら被災体験を語る方の傍らで、あぐらをかいて背中を丸めた姿で「うんうん」と頷いているT先生(医師)がいた。別のテーブルでは、G先生(医師)が手作りの郷土料理を美味しく食べていた。そうした中で、私は改めて「何もしないをする」の意味を考えていた。

すると、『たきび』を歌った方が『斎太郎節(さいたらぶし)』を歌い始め、民俗芸能の虎舞や甚句合戦を始めたのである。それこそが、その方たちのソウルミュージックだったのである。私は、「ああ、そうだった」と思った。津波が奪ったのは、人の命や家屋ばかりではない。文化やその文化を表現する場も失われたのである。その文化とは、古くから自然の畏怖や共存の願いからなる豊かな郷土芸能、そしてその上に培われた大槌の方たち個人の歴史である。そう思った。

**「こちらから音楽を提供するのではなく、この方たちの中から聞こえる音楽に耳を傾ける事から始めよう」**

「何もしないをしに行く」の意味が分かりかけた瞬間だった。 \*\*\* 中略 \*\*\*

お茶っこでは、同じ空間に悲しみと豊かさが矛盾することなく調和していた。

「何もしないをしに行く」お茶っこのあり方は、普段緩和ケアで行っている音楽のあり方にとっても似ている。緩和ケアの音楽療法では、その時に自然に生まれたか感情や表現を大切にしていく。それは言い換えると「積極的な受け身の姿勢」ということだと思う。悲しいことも、つらいことも、喜びも、誰にも比べられないその人だけのものとして等しく大切にすることで、その人の中に、その人にとっての価値あるものを発見していくという「決意」のようなものである。 \*\*\* 以下略 \*\*\*

「この方たちの中から聞こえる音楽に耳を傾ける」こと。それは、行く先の不安から出てくるお年寄りたちの心の叫びや体現の傍らにいる私たちの日常に重なるものを感じ得るものです。大切な人と死別した悲嘆の深さは、解決しようのない、行き場のないものではありませんが、それでも、そのような気持ちの傍らに居続けること、耳を傾けることの大切さを改めて教わるものでした。今月も宜しくお願い致します。

**(2) 連絡事項について**

〔講話+③④=理事長、①=生活課長、②=事務課長〕

- ① 本日は、A.Tさんが9時30分、苑迎えて短期入居となります。
- ② 4月21日(火)は職員健診です。追加健診の方もいますので、大事に考えて受けましょう。
- ③ 行事予定は、9日夜間防災訓練、18日お年寄りを護る会、24日震災を偲ぶ彼岸会となります。
- ④ 昨日、S.Kさんが急逝されました。ご近所だったRさんとKさんが会いに行き、別れを惜しんでいました。会いたくない方は別ですが、最後会わせてさしあげる丁寧な対応も大事にしましょう。